

崇禎本「金瓶梅」各回冒頭の詩詞について

荒 木 猛

On the Introductory Poems in *Su Tei* (崇禎) Edition's of *Chin Ping Mei* (金瓶梅)

Takeshi ARAKI

はじめに

知られる通り、現存する「金瓶梅」には、大きく言って(一)万曆丁巳年東吳弄珠客の序のある「金瓶梅詞話」本(以下これを「万曆本」と称する)と、(二)「新刻繡像批評金瓶梅」本(この本は、崇禎年間に刊行されたものと推定されているので、以下これを「崇禎本」と称する。)(三)清朝になって張竹坡が批評を加えた本で、康熙乙亥の年の謝頤の序のある「第一奇書金瓶梅」(以下これを「康熙本」と称する)の以上三種類の版本がある。このうち「康熙本」は、「崇禎本」の本文に張竹坡の批評を加えた本だということが明らかにっており、従って、基本的には「康熙本」も「崇禎本」と同一系統の本と見做すことができるので、極く大ざっぱに言うならば、現存「金瓶梅」には「万曆本」と「崇禎本」の兩種の版本のみ存すると言うことができる。

「万曆本」は、作中、誤字・誤写・衍文・缺文、さらには前後の話の脈落がつかない部分が少なからず見られる版本として知られ

るが、「崇禎本」では、これらの誤りが大体改められ、大変読みやすくなっている。では、「崇禎本」に筆を執ってこのように改めた人は一体誰だったのであろうか。「万曆本」の作者とともに、現在に至っても尚明らかになっていない。かつて、鄭振鐸氏は、ある無名の杭州の文人が「万曆本」に大斧鉞を加えたものではないかと推測し(『談「金瓶梅詞話」』『文学』創刊号所収、一九三三年)、また最近では黄霖氏が、確証はないが、「三言」の編者で有名な馮夢龍ではないかと推測されている(『「新刻繡像批評金瓶梅」評点初探』「成都大学学报」、一九八三年)。しかし、いずれも推測にすぎない。一日も早いこの改作者が誰なのかその実姓名が明らかにされることが待たれるところである。

ところで、本稿は、「崇禎本」各回の冒頭につけられている詩詞の典拠を手懸りとして、この改作者の周辺を探ってみようと試みたものである。結論から先に言くと、「崇禎本」の各回の冒頭に引用された詞の中に、万曆年間の文人の王穉登や馮琦の作のみられることから、この改作者は、これら万曆の文人集団のうちの一人

であるか、あるいは、万暦を去ること遠からぬ時期の人で、万暦の文人の作った詞を見ることのできた人であらうことが考えられる、依然として、改作者が誰なのかを判明しえたわけではないが、以上のことが改作者の素姓を考える上での一応の手懸りになりうると考えられるので、ここに以下小考を草するものである。

一、「万暦本」と「崇禎本」の相違

まず、「万暦本」と「崇禎本」との間にはどのような違いがあるかを見ておこう。凡そ、この両版本の間には、次のような相違がある。

(一)、小説の冒頭第一回の書き出しがまったく違う。「万暦本」では、まず武松の虎退治の話から始まるが、「崇禎本」では、西門慶が応伯爵・謝希大らの遊び仲間と義兄弟の誓いを立てる話から始まっている。

(二)、第五十三回・五十四回の大部分が違う。「万暦本」では、この部分で叙述上大きな混乱があるが、「崇禎本」では、それが大いに整理されている。

(三)、「万暦本」の第八十四回では、呉月娘が泰山参籠の帰り、清風山で山賊の頭目王英に拉致され、あわや「手ごめ」されそうになる所を、たまたまその時その山寨に居合せた宋江によっておしとどめられ事無きを得る一段があるが、「崇禎本」では、この部分

まったく削られている。

(四)、各回の表題および各回冒頭の詩詞が互いに違う。

(五)、「万暦本」では、山東方言が多いが、「崇禎本」では、それが削られるなどして改められている。

(六)、「万暦本」には、明代の俗曲や宝巻、長い上奏文や道士の祈祷文、食物・着物・芝居の情景等の丁寧な説明、「看官聽說」以下の作者の読者に対する語りの言葉等、様々なものが書き加えられているが、「崇禎本」では、凡そそれら筋や話の展開と直接関係がないような部分は削り去られている。

以上が、「万暦本」と「崇禎本」との主なる違いである。これらを総合して考えるならば、「崇禎本」は、「万暦本」を底本として、それに手を加えて成った改訂本であると考えるほうが妥当であって、現在一部の学者が唱えるように、この両版本がそれぞれ別の稿本に基づいてできた別系統の版本であるとは考えにくい。

さて以上のような違いは、どうしてできたのであろうか。「崇禎本」が「万暦本」の改訂本であるとするれば、「万暦本」に筆を加えて「崇禎本」にした人は、何故このように改めたかということになる。「万暦本」の第一回と第八十四回は、それぞれ「水滸伝」の巻二十三と巻三十二よりの借用であることからすれば、(一)と(三)の改筆は、「水滸伝」からの影響から脱して、「金瓶梅」を、より一つのまとまりのある独立した作品として完成させようとする意

図によるものと考えられる。また、(二)の叙述上の混乱を改めたり、(五)の山東方言等を削るなどする傾向は、読み物としてより読みやすくしようとする意図に出たものに相違あるまい。(六)の傾向については、故小野忍氏の言を借りるならば、「総じて『詞話本』(本稿でいう『万暦本』)は、戯作調が強いのであるが、『改訂本』(本稿でいう『崇禎本』)では、それが弱められている。それだけ写実に近いといえるが、『詞話本』の戯作調には棄てがたいものがある。」(平凡社版中国古典文学大系「金瓶梅」解説による)とあって「万暦本」の方が総じて「崇禎本」よりすぐれているとされるが、おそらくこの「崇禎本」の改作者の意図としては、やはり、作中あまりに長たらしい戯作的箇所があったのでは、間延びしてしまうと考え、それらを削ったもので、同じく読者の便を考え読みやすくせんと意図にでたものであろう。

さて、では(四)の改修は、いかなる理由に因るものだろうか。表題については、ほとんど同じで変えてないものもあるが、例えば次の七十二回のように「万暦本」での字数の不揃いを改めたものも結構ある。

(万暦本) 王三官拜西門慶為義父、応伯爵替李銘解冤
(崇禎本) 潘金蓮摑打如意児、王三官義拜西門慶

ところが、各回冒頭の詩詞となると、「万暦本」と「崇禎本」がまったく同じで変えてないのは五、七、十四、十六、二十四、三

十九、四十二、五十一の各回におけるその八例にすぎず、あとの九十二回はすべて変えているのである。これは一体いかなる理由に因るものであろうか。

二、「万暦本」冒頭詩詞の特徴

この理由を求める前に、まず「万暦本」における各回冒頭詩詞の特徴を見ておこう。その特徴としては、以下の四点が考えられる。

まず言える第一の特徴は、教訓詩、人生訓詩、格言詩と見られるものが比較的に多いことである。二、三例を挙げるならば、

一、二十回の冒頭詩⁽⁵⁾

在世為人保七旬 何劳日夜弄精神
世事到头終有悔 浮華過眼恐非真
貧窮富貴天之命 得失榮華隙里塵
不如且放開懷樂 莫使蒼然兩鬢侵

(訳)⁽⁶⁾

人のいのちも七十年

醒^{あく}醒^せなさるな日ごとに夜ごと

何をしたとて悔いがくる

派手な暮らしも嘘^{うそ}の皮

富むも富まぬも運賦に天賦

栄耀^{えいよう}栄華^{えいけ}は隙間^{すきま}の塵^{ちり}さ

いっそ氣ま^きまに楽しんで

白髪^{しろがみ}ふやさぬ算段^{さんだん}なされ

二、四十九回の冒頭詩

寛性寛懷過幾年 人死人生在眼前

随高随下随縁過 或長或短莫埋怨

自有自無休歎息 家貧家富總由天

平生衣祿随縁度 一日清閑一日仙

(訳)

浮世幾年ゆったり暮らせ

死ぬも生きるもつい目の先よ

高いも低いも運賦^{うんぷ}にまかせ

短い長いで泣きごとというな

有っても無くても溜息^{ためいき}つくな

富むも貧乏もお天道しだい

着もの食べものみな縁のもの

のんびり暮らせばその日が仙人

この外にも、これに類した教訓的詩詞を各回の冒頭に掲げていることが少なくない。言うまでもなく、「金瓶梅」というこの小説には、性行為に関する描写が頻繁かつ執拗^{しつよう}になされている。それ

故に、久しい間、「淫書」と目されてきた。そうした小説にとつて、これら欲望を否定し、道家的人生哲理を鼓吹しようとするが如き詩詞は、一見して大変な矛盾のように思われるかもしれない。しかし、人間とは、本来矛盾に満ちた存在なのである。時には欲望を肯定しながら、また時にはこれを嫌悪するものである。誠に「万曆本」冒頭にある欣々子の序に言う「房中の事の如きは、人皆之を好み、人皆之を惡^{にく}む」は、蓋し至言である。とは言え、この「万曆本」の作者の場合は、やや特異であると思われる。察するに、この人は元来欲望の強い人であり、それ故にこそ、その欲望の否定されなければ、心の安寧は到底得られないこともよく知っていた人にちがいない。

「万曆本」の各回冒頭詩詞の特徴の二は、「金瓶梅」に先行する「話本」や「小説」からの引用の多いことである。その中でも、特に、「水滸伝」からの引用が顕著である。ことは、すでに拙稿『話本』と『金瓶梅』（長崎大学教養部紀要第三十巻第二号）で指摘したが、今、重複を厭^{いと}わずに再び掲げるならば、次の通りである。

一回「丈夫隻手把吳鉤……」（眼兒媚詞）……「清平山堂話本」

”刎頸鴛鴦会”

三回「色不迷人人自迷……」（七律詩）……（類似）「水滸伝」二
十一回

四回「酒色多能悞国邦……」（七律詩）……「水滸伝」二十四回

五回「参透風流二字禪……」(七律詩)……「水滸伝」二十六回
「古今小説」卷三・同卷三十八。

六回「可怪狂夫恋野花……」(七律詩)……「水滸伝」二十五回
九回「色胆如天不自由……」(七律詩)……(類似)「水滸伝」二
十六回

十回「朝看瑜伽經……」(五律詩)……「水滸伝」四十五回、「古
今小説」卷三十四

十八回「堪嘆人生毒似蛇……」(七律詩)……「水滸伝」五十三
回

十九回、九十四回「花開不挾貧家地……」(七律詩)……「水滸
伝」三十三回

二十回・九十七回「在世為人保七旬……」(七律詩)……「水滸
伝」七回

二十七回「頭上青天自恁欺……」(七律詩)……「水滸伝」八回
三十回「得失榮枯總是閑……」(七律詩)……「大唐秦王詞話」

十八回

四十六回「帝里元宵、風光好……」(詞)……「大宋宣和遺事」

前集

七十二回「寒暑相推春復秋……」(七律詩)……「大唐秦王詞話」
十二回

七十五回「万里新墳尽十年……」(七律詩)……「古今小説」卷

二十九

八十七回「平生作善天加福……」(七律詩)……「水滸伝」二十
七回

八十八回「上臨之以天鑒……」(六言詩)……「水滸伝」三十六
回

八十九回「風拂烟籠錦旆揚……」(七律詩)……「水滸伝」三回

九十二回「暑往寒來春復秋……」(七律詩)……「水滸伝」三回

九十九回「一切諸煩惱……」(五律詩)……「水滸伝」三十回

このように、「万曆本」各回の冒頭詩詞に「水滸伝」からの引用
が多いことは、「万曆本」がプロットのみならず、文辞においても
「水滸伝」に深く依存していたことの証である。^{あかし}

「万曆本」各回の冒頭詩詞における特徴の三は、同じないし類似
の詩詞を再三使うことのある点である。例えば、十九回の次の七
言律詩は、すでに挙げたように九十四回冒頭にも使われている外
に、四十八回末にも類似の詩が用いられている。

花開不挾貧家地 月照山河処処明

世間只有人心歹 百事還教天養人

痴聾瘖啞家豪富 伶俐聰明却受貧

年月日時該載定 算來由命不由人

(訳)

貧しき家にも花は咲き

山にも川にも月は照る

人の心がわるいだけ

これもやっぱり天のわざ

のろまの家は栄えても

かしこい人はびんぼする

生まれた月日で万事がきまり

よろず何事運次第

同様の例としては、十三回の七言律詩は、八十六回冒頭に再度用いられ、十七回の七言詩は、八十二回冒頭に類似詩を、また十三回末にも類似詩が掲げられている。また二十回冒頭の七律詩は、九十七回に再度用いられ、二十二回冒頭の七律詩も、やはり七十三回に再び用いられている。さきの先行小説（特に「水滸伝」）からの詩詞の借用といい、この同じ詩詞の重複使用といい、これらのことは、みなこの小説製作上における、ある種の安直さを示していると思われる。ことに、七十九回以降に詩詞の重複使用が目立つのは、叙述の点においても、この回を境としてにわか
に簡略かつ粗雑になっている点とを考え合わすならば、この回以前とそれ以降とは作者を異にしているのではないかという疑いを抱かせるものであるが、この問題に関しては、別に稿を立てて論ずるつもりなので、ここではこれ以上深入りはしない。

「万暦本」各回の冒頭詩詞の特徴の四は、往々の内容が莫然とし

ていて、その回の内容との関係がどこにあるのか理解に苦しむものの少なくないことである。例えば、次の四十七回冒頭の七言律詩が、そうである。

風擁狂瀾浪正顛 孤舟斜泊抱愁眠
離鳴叫切寒雲外 駢鼓清分旅夢辺
詩思有添池草緑 河船天約晚潮昇
憑虚細数誰知已 惟有故人月在天

(訳)

旅寝の枕は波の上
しばし船とめまどろめば
雲をつんざく鳥の声
夢にドロロン時太鼓
岸辺の緑目にしみて
暮れりや夕潮あげて来る
身は天涯の孤客にて
しるべはひとりお月さま

この詩は、旅にあって心細い旅人の気持を詠んだ詩と思われるが、この四十七回の内容、即ち、苗天秀殺害事件とは直接にはな
らば、彼が仕官を求めて上京する途中、旅先で殺されているのである。さすれば、「万暦本」の作者は、この旅に因んでこの回の冒

頭にこの詩を掲げたものと思われる。しかし、いささか牽強附会けんきやうふゑの憾うらみなしとしないであろう。また、七十回冒頭の詩は、辺塞の情景を描いたものと思われるが、この回は西門慶が昇進謝恩の為上京するので、やはり旅に因ちなんで掲げた詩であると思われる。更に、八十九回や九十八回の冒頭詩詞は、その回に描かれた時節に因むものと思われ、また、六十八回の七律詩は、孟昭連氏によれば、李瓶児の死を暗喩するものだ^⑦とされるが、いずれも、その回との関係が大変分かりづらい。

「万曆本」各回の冒頭詩詞における特徴は、凡そ以上の通りである。

三、冒頭詩詞における両版本の相違

では、これら「万曆本」各回の冒頭詩詞が「崇禎本」ではどう改められているのであろうか。次にこの点に関して、二、三の実例につき、これを見てみよう。

三十一回は、西門慶が初めて提刑官という役人になり、かつ宿願の一子を儲けるという前回をうけての段であるが、この回の「万曆本」の冒頭詩詞は、次のようである。

家富自然身貴 逢人必讓居先

貧寒敢仰上官憐 彼此都看錢面

婚嫁專尋勢要 通財邀結豪英

不知興廢在心田 只靠眼前知見

(訳)

富めば自然に地位もでき

人もかならず先をば譲る

貧者は目上に情けを仰ぎ

誰でも彼でもお金で動く

お嫁にいくなら幅利く人に

金をまくならおえらい方に

浮くも沈むもお心次第

けれど目先をあてにする

この詩の内容は、所謂「浮世の人情、金次第」ということを言おうとしているのだが、この回の内容とのかかわりを考えてみると、この詩は、今やお金の外に地位までできた西門慶の一子官哥の生後一ヶ月の祝いに西門邸にかけつけた幾多の武官や宦官達を嘲笑しているものであることは明らかである。では、同じ回の「崇禎本」における冒頭詩詞はどうなっているのか、と言うと、次の通りである。

幽情憐独夜 花事復相催

欲使春心醉 先教玉友来

濃香猶帶膩 紅暈漸分腮

莫醒沈酣恨 朝雲逐夢回

(訳)

一人寝のわびしき思い
花だより相継ぎやまず
わが心酔はんとすれど

かの君のいずこにありや

濃き香いたくかおりて

頬は火照り慕いかつ恋う

めぐりあい恨みを伝えど

その夢の醒めし苦しきよ

一読して、孤閨の情を述べた詩であることがわかる。一体誰の情を想定したものであろうか。この回の内容とあわせて考えるならば、直ちに潘金蓮の立場に立つて詠まれたものであることが分かる。李瓶児が一子官哥を産んでからというもの、西門慶は金蓮から遠ざかり、瓶児のもとにはかりに行く、そこで、金蓮は空閨に嘆くのである。この例でもわかる通り、「万曆本」の冒頭詩詞が、道家的人生哲学や教訓をその内容とするものが多いのに対し、「崇禎本」のそれは、人間の心情、特に女性の空閨の情を詠んだものが多く、そうしたものに改められている。

今一例見てみたい。第十五回の冒頭詩詞は「万曆本」では、次のようになっている。

日墜西山月出東 百年光景似飄蓬

点頭纔羨朱顔子 転眼翻為白髮翁
易老韶華休浪度 掀天富貴等雲空
不如且討紅裙趣 依翠偎紅院宇中

(訳)

西に日が入りや東に月と

めぐる月日も夢うつつ

若い若いといっているうちに

いつか白髪のお爺さん

しばむ花なら盛りを惜しめ

溜めたお金が何になる

どうせ浮世よ色香をもとめ

廓遊びといくがよい

この回の後半に、西門慶が応伯爵ら取り巻き連中と一緒に廓にいて遊ぶ段があるので、この詩のうちのおしまいの二句が、これと関連する。しかし、全体の内容は、やはり“無常迅速”なる人生哲理を詠んでいる。これに対して、「崇禎本」の方は、どうなっているのだろうか。

楼上多嬌艷 当窗井三五

争弄遊春陌 相邀開綉戸

転態結紅裾 含嬌入翠羽

留賓乍拂絃 托意時移柱

(訳)

二階に居並ぶ綺麗どこ

三三五と窓に寄り

春の小路を浮かれて来た客を

さあいらっしやいと招じ入る

今日めかして紅の裳^{もぎせ}をつけ

愛嬌^{まじ}振り撒き青い羽根のマントをかぶる

客を留めんと爪弾く琴の

ねじめの調整のべつたのむかな

これは、この回の前半において、月娘ら西門慶の妻妾らが、李瓶児の家で、元宵節の燈籠見物を行う一段に因んでいることは明らかである、このように、「万暦本」の詩詞には人生観を込めたものが多く、詠みこまれている内容も時には大きすぎて、ややもすれば当該の回の内容との関係が薄くなりがちであるところを、「崇禎本」では、できるだけ回の内容に即したものに換えようとしていることが多い。では、これら以外の回ではどのように換えられているのだろうか。

今、これを、その詩詞が当該の回の内容と関係のあるものかどうか、また教訓的であるかどうか、更には詩かそれとも詞かという観点に立って、この両版本の相違をまとめようとしたのが、次の表である。これまで見てきたように、中にはその詩詞が当該の

回の内容と関係があるのかどうか判断に苦しむものも少なくあったが、一応ここでは、牽強附会と思えるものでもすべて関係ありとした。尚、アラビア数字は、回数を示したものである。

a、「万暦本」と「崇禎本」が同じ

5・7・14・16・24・39・42・51……八例

b、「万暦本」教訓的な詩↓「崇禎本」その回の内容に即した詩

3・10・19・28・76・86・87・88・90・92・93・94・95・98・100……

十五例

c、「万暦本」教訓的な詩↓「崇禎本」その回の内容に即した詞

13・20・22・29・30・49・73・79・97……九例

d、「万暦本」教訓的な詩↓「崇禎本」その回の内容と無関係の

詩詞

33・43・48・75・91・99……六例

e、「万暦本」その回の内容と無関係の詩↓「崇禎本」その回の内容に即した詩詞

36・37・44・59・66・70・71・85・96……九例

f、「万暦本」その回の内容に即した詩詞↓「崇禎本」その回の内容と無関係の詩詞

11・12・21・80……四例

g、「万暦本」も「崇禎本」もその回に即した詩詞

1・2・4・6・8・9・15・17・18・23・25・26・27・31・32・34・

35・38・40・41・46・47・50・52・53・55・56・57・58・60・61・
62・63・64・65・67・69・77・78・81・82・83・84・89……四十四
例

h、「万曆本」も「崇禎本」もその回の内容と無関係の詩詞

45・54・68・72・74……五例

これによっても分かる通り、「崇禎本」では、まず、(一)教訓的な詩詞を排除しようとしていること。(二)できるだけ、その回の内容に即したものに改めようとしていること、が分かる。では詩と詞の割合はどうなっているのだろうか。この点について見てみると、「万曆本」は、詩(格言を含む)九十八首、詞二首なのに対し、「崇禎本」では、詩五十二首、詞四十八首、と圧倒的に「崇禎本」において詞が増加していることが分かる。しかもその詞の内容のほとんどが閨房の情を詠んだものである。このような違いは、恐らく作者と改作者の好みの相違によるものと思われる。現在までの所、作者も改作者もまだ不明であり、可能性としては作者と改作者が同一人物であったことも考えられるのであるが、この冒頭詩詞に関して考えるならば、道家的人生訓の好きな「万曆本」の作者と、孤閨の情を内容とする詞を好む「崇禎本」の改作者とでは、まったく別の人物であったと考える方が妥当であろうと考えられる。

四、「崇禎本」各回冒頭詞の出典について

前節で、「崇禎本」における各回冒頭詞の詩詞においては、「万曆本」のそれに比べて、その回の内容に即した詩詞になっていることと、詞の増加、わけでも婦女の心の内面即ち閨情を詠んだ詞が増えていることについて見た。「万曆本」にあつては、主に「水滸伝」からの借用の作が多かったので、時にはそれぞれの回の内容にそぐわない傾向があつたのも、やむを得ないことであつた。しからば「崇禎本」各回の冒頭詩詞は、この改作者自身の作だったのであるのか。実は、案に相違して、詞の大部分が他人の作の借用であることが今回判明した。次表は、各冒頭詞の詞牌名の出典、それに作者名をしるしたものである。

二回(孝順歌)芙蓉面、冰雪肌、……

——「吳騷集」卷四、目錄では、明・王寵作、本文では、明・梁辰魚作

十回(踏莎行)八月中秋、涼颼微逗、……

——「草堂詩余新集」⁸⁾卷二、明・唐寅作、題「秋閨」。

十三回(山花子)綉面芙蓉一笑開、……

——「統選草堂詩余」卷上、北宋・李清照作、題「閨情」。

十八回(柳梢青)有個人人、海棠標韵、……

——「草堂詩余正集」卷一、北宋・周邦彥作、題「佳人」。「草堂

詩余後集」下卷ならびに「全宋詞」三七四二頁では、宋・無名氏作。

二十回（帰洞仙）歩花徑、闌干狹。……

―「南宮詞紀」卷一ならびに「吳騷合編」卷三では、明・梁辰魚作。「南音三籟」散曲上では、明・王九思作、題「女郎」。

二十一回（少年遊）并刀如水、吳塩勝雪、……

―「全宋詞」六〇六頁ならびに「草堂詩余正集」卷一では、宋・周邦彦作、題「冬景」。

二十二回（桂枝香）今宵何夕、月痕初照。……

―「吳騷合編」卷一、明・王穉登作、題「歡会」。

二十五回（点絳脣）蹴罷鞦韆、……

―「詞的」卷一では、北宋・周邦彦作。「詞林万選」卷四では北宋・李清照作。「全宋詞」六三〇頁・九三四頁ならびに「花草粹編」卷一では、無名氏作。

二十七回（好女兒）錦帳鴛鴦、繡衾鸞鳳。……

―「草堂詩余新集」卷三、明・楊慎作、題「佳人」。

三十三回（意難忘）衣染驚黃。愛停板駐拍、……

―「全宋詞」六一六頁、北宋・周邦彦、作題「美詠」。

三十四回（川撥棹）成吳越、怎禁他巧言相關謬。……

―「南宮詞紀」卷一では、明・鄭若庸作、題「大揭帖」。「吳騷集」卷三では、明・王穉登作。「南音三籟」散曲下では、明・

高明作。「南九宮詞」「吳騷合編」卷四「詞林摘艷」卷二では、無名氏作。

三十七回（薄倖）淡粧多態、更的的頻回眄睐。……

―「草堂余正集」卷五、北宋・賀鑄作、題「春情」、一題「憶故人」。「全宋詞」五一三頁、宋・賀鑄作。

四十一回（滿庭芳）瀟洒佳人、風流才子、……

―「草堂詩余正集」卷三、宋・胡浩然作、題「吉席」。「全宋詞」三三三七頁、胡浩然作。

四十三回（滿庭芳）情懷增悵望、新歡易失、……

―「全宋詞」四五八頁、北宋・秦觀作。

四十四回（滿江紅）晝日移陰、攬衣起、……

―「草堂詩余正集」卷三、北宋・周邦彦作、題「春闌」。「全宋詞」五九八頁、周邦彦作。

四十五回（玉蝴蝶）徘徊。相期酒会、……

―「草堂詩余正集」卷四、北宋・柳永作、題「春遊」、「全宋詞」四十頁、柳永作。

四十六回（浪淘沙）小市東門欲雪天、……

―「花間集」卷四、南唐・張泌作。

四十八回（桂枝香）碧桃花下、紫簫吹罷。……

―「唾窗絨」明・沈仕作、題「閨怨」。

五十回（菊花新）欲掩香幃論繾綣、……

—「全宋詞」三八頁、北宋・柳永作。

五十四回（浪淘沙）美酒斗十千、更對花前。……

—「草堂詩余別集」卷二、吳遵巖作、題「賞芙蓉」。

五十五回（喜遷鶯）師表方眷遇、魚水君臣。……

—「全宋詞」一三〇四頁、南宋・唐与之作、題「丞相生日」。

五十八回（帝台春）愁旋積、還似織、……

—「草堂詩余正集」卷四、北宋・李甲作、題「春恨」。「全宋詞」

四九〇頁、李甲作。

六十回（臨江仙）倦睡懶々生怕起、……

—「草堂詩余新集」卷三、明・秦公庸作、題「憶旧」。

六十一回（菩薩蠻）蛩声泣露驚秋枕、……

—「草堂詩余正集」卷一、「草堂詩余前集」卷下、北宋・秦觀作、

題「秋閨」、一題「閨怨」、「全宋詞」四五九頁、秦觀作。

六十六回（卜算子）胸中千種愁、……

—「草堂詩余正集」卷一、北宋・徐俯作、題「春怨」。

六十七回（蘇幕遮）朔風天、瓊瑤地。……

—「草堂詩余正集」卷二、宋・范希文作、題「懷旧」。

六十八回（翠雲吟）鍾情太甚、到老也無休歇。……

—「草堂詩余新集」卷四、明・林鴻作、題「留別」。

七十一回（蝶恋花）花事闌珊芳草歇、……

—「詩余選」卷一、北宋・蘇軾作、題「離別」。

七十三回（長相思）喚多情、憶多情、……

—「草堂詩余新集」卷一、明・祝允明作、題「多情」。

七十七回（望江南）梅共雪、歲暮闌新粧。……

—「草堂詩余新集」卷二、明・馮琦作、題「梅雪双樓圖」。

七十八回（南歌子）鳳髻金泥帶、龍紋玉掌梳。……

—「草堂詩余別集」卷二、北宋・歐陽修作、題「美人」。「全宋

詞」一四〇頁、歐陽修作。

七十九回（青玉案）人生南北如岐路、……

—「草堂詩余正集」卷二では、金・吳激作、題「驚悟」。「草堂

詩余後集」卷下では、無名氏作、題「驚悟」。「全宋詞」三

七四二—三七四三頁でも無名氏作とする。

八十二回（西江月）聞道双啣鳳帶、……

—「全宋詞」二八四頁、北宋・蘇軾作。

八十九回（翠樓吟）佳人命薄、嘆絕代紅粉、……

—「草堂詩余新集」卷四、明・丘濬作、題「慰下第」。

九十六回（人月圓）人生千古傷心事、……

—「全宋詞」四頁、金・吳激作。

九十七回（鳳銜杯）追悔当初辜深願。……

—「草堂詩余新集」卷下、北宋・柳永作、題「閨怨」。「全宋詞」

一八頁、柳永作。

九十九回（蘇幕遮）白雲山、紅葉樹。……

「草堂詩余新集」卷三、明・劉基作、題「傷往」。

以上「崇禎本」各回冒頭詞全四十八首のうち、作者が判明したのは、実に三十七首にも及び、今回わからなかった残る十一首も、他人の作である可能性が大きい。さて、これら作者のわかった三十七首のうち、明人の作が十四首もあるのが注目される。今、これら明の作詞家を時代順にならべると、次のようになる。

高明（字東嘉）生没年不明、元末明初の人。

林鴻（字子羽）生没年不明、明初の人。

劉基（字伯溫）（二三一一～一三七五）

丘濬（字瓊山）（一四一八～一四九五）

祝允明（字希哲）（一四六一～一五二七）

王九思（字濂陂）（一四六八～一五五一）

唐寅（字伯虎）（一四七〇～一五二三）

王寵（字雅宜）（一四九四～一五三三）

楊慎（字用修）（一四八八～一五五九）

沈仕（字青門）約一五〇六年前後在世⁹

梁辰魚（字伯龍）（一五一九～一五九二）¹⁰

鄭若庸（字虛舟）約一五三五年前後在世¹⁰

王穉登（字百穀）（一五三五～一六一二）

馮琦（字用韞）（一五五八～一六〇三）

秦公庸 字・里・生没年均不詳¹¹

このうちの、王穉登と馮琦は、正に万暦時代に活躍した人物である。

「崇禎本」の改作者が、「万暦本」に筆を入れて、この改作を行なったのは、万暦末から天啓年間にかけると予想されるので、時間的には、勿論この改作者が彼等の詞を利用することは可能である。しかし、この改作者は、何故、いわば同時代と言ってもいい王穉登や馮琦の詞を、「崇禎本」にとりこんだのであろうか。皆目分らないことばかりだが、少なくとも言えることは、この改作者は、詞の愛好者であったということである。更に言うならば、王穉登や馮琦の詞に日頃から親しんでいた人であったことが予想される。その人は、一体誰なのであろうか。残念ながら、今の所この人物の真姓名を知るてだてがないのである。

五、残された問題

二点ばかり、気になっていることで、未だ確証が得られないために、未解決のままになっている事柄を以下に書いて、諸賢の御教示を仰ぎたいと切に思う次第である。

その第一は、「崇禎本」の改作者が馮夢龍である可能性である。中国の黄霖氏が「崇禎本」の改作者を馮夢龍でないかと推測されていることは、冒頭でもふれた通りである。また、最近、台湾の魏子雲氏もやはり、馮夢龍が「崇禎本」の改作と出版に関与していたのではないかと主張されている。¹² 馮夢龍は、沈徳符の「万暦

野獲編」によれば、万曆四十一年頃、当時沈徳符が所持していた「金瓶梅」の鈔本を見て驚喜し、出版社に出してこれを出版することをすすめたことは、周知の所である。また、これは証拠はないが、「金瓶梅序」を書いた東呉弄珠客とは、馮夢龍だという説がある。かく考えてくるならば、馮夢龍が「金瓶梅」に関与しなかったはずはないと考えられるのである。しかし、遺憾なことには「金瓶梅」の改作と馮夢龍とを結びつける明瞭なる証拠は、今の所なにもないのである。

ところで、今ここに一つのかすかなる手懸りを得た。実は、馮夢龍がやはり手を入れた戯曲「女丈夫」伝奇の第一折冒頭に、「人生南北如岐路、世事悠悠等風絮。……」という青玉案詞が使われているのであるが、この詞は、すでに前節で見た通り、「崇禎本」第七十九回の冒頭にも使われており、「草堂詩余」によれば、この詞は、金の呉激の作ということになっている。「金瓶梅」七十九回は、西門慶が死ぬという、いわばこの小説のクライマックスの回である。「万曆本」のこの回の冒頭には、「仁者難逢思有常、……」という、北宋邵堯夫の「仁者吟」という七言律詩（『伊川擊壤集』巻六に収む）をのせるが、「この世のすべてに、頼れるものなどない」という主旨の呉激のこの詞の方が、この七十九回にははるかにふさわしい。馮夢龍は、時間の人事にもたらす影響というものにことの外興味をいだいていたと考えられるので、恐らく日頃か

ら、呉激のこの詞が好きだったのではあるまいか。それで一方では「金瓶梅」七十九回の冒頭に、他方戯曲「女丈夫」第一折冒頭に、それぞれこの詞を用いたのではあるまいか、と考えるものである。勿論、「女丈夫」の方は、張鳳翼と劉晋充の原作に馮夢龍が手を加えているので、問題のこの詞が原作にすでに使われていた可能性も充分にある。もしそうであれば、この手懸りも烏有に帰してしまうことになるが、一応これに記して、諸賢の参考に供したいと思う。

その二は、「崇禎本」の改作者が、適当な冒頭詞を捜すのに主に使った書物は、「合刻類編箋釈草堂詩余」¹⁵ないし、翁少麓刊「草堂詩余」ではなかったかということである。これは、前節で見た通り、「崇禎本」各回の冒頭詞の出典の大半が、これらの書から見い出されるからである。「合刻類編箋釈草堂詩余」には、万曆甲寅（四十二年）の序がある。万曆四十二年と言えば、王穉登が編した「呉騷集」四巻が出版されたのも、この年のことである。従って、もし、この「崇禎本」の改作者が、真にこの「草堂詩余」を利用して改作を行なったとすれば、その行為は、万曆四十二年以降ということになる。しかし、当時この「草堂詩余」に類する別の書物（今は伝わらない）があり、それを利用していた可能性もないわけではない。いささか自信を欠くので、一応ここに記しておく、他日、明確なる証拠を得た時に、再びこれを論じたいと思う。

注

- (1) 「金瓶梅」登場人物のうち、「万曆本」において、花子由ならびに呉巡検として登場する人物の名前が「崇禎本」においては、それぞれ、花子繇ならびに呉巡簡に改められている。これは、思宗崇禎皇帝朱由檢の諱を避けた為かと考えられており、このことから、この書は崇禎年間に刊行されたものと推定されている。
- (2) 「万曆本」に見られる叙述の混乱については、鳥居久靖「『金瓶梅』作者試探」(『中文研究』第四号、一九六四年)や、阿部泰記「『金瓶梅詞話』の叙述の混乱について」(小樽商科大学「人文研究」第五十八輯、一九七九年)において、具体的な指摘がなされている。
- (3) 「万曆本」に山東方言が多く見られるが、「崇禎本」ではこれが改められていると、最初に指摘したのは、鄭振鐸(談『金瓶梅詞話』一九三三年)であり、つづいて、呉晗(『金瓶梅』的著作時代及其社会背景一九三四年)、魯迅(『中国小説史略』日本語訳序、一九三五年)、趙景深(談『金瓶梅詞話』一九五七年)、李西成(『金瓶梅』的社會意義及其藝術成就、一九五七年)、張鴻勛(『試談『金瓶梅』的作者・時代・取材』、一九五八年)らも、同様の指摘を行い、遂に、中国科学院文学研究所編の『中国文学史』(一九六三年)でも、「作者は、山東方言の運用に熟練していた」と書くに至った。しかし、この間、具体的に「万曆本」のうちのどの言葉が山東方言なのかを指摘されることが絶えてなかった。最近になって、張遠芬が、「金瓶梅」の作者は山東嶧県の人で賈三近であろうとされ、その証拠として、「万曆本」より八百条にわたる嶧県方言を抽出し、これを発表した。(『金瓶梅新証』、一九八三年)これに対し、李時人が、嶧県方言を他と明確には区別できないとして、嶧県方言という概念自体科学的不正とした。(賈三近作『『金瓶梅』説不能成立』一九八八年、これより先、朱星は、一口に山東方言と言っても、胶東、淄博、濟南では、明確な違いがあるので、山東方言という言い方も極めてあいまいな言い方であるとした。)(『『金瓶梅』的作者究竟是誰』一九七九年)、これらの意見に対し、「万曆本」の中に北方方言に混じって、呉語があると

崇禎本「金瓶梅」各回冒頭の詩詞について

指摘したのは、戴不凡が始めた。(『『金瓶梅』零札六題』一九八〇年)、同様に、「万曆本」中に呉語が見えることを指摘し、かつこの作者はむしろ呉語に慣れた人ではなかったかとしたのだが、黄霖であった。(『忠義水滸伝』与『金瓶梅詞話』一九八二年、『『金瓶梅』作者屠隆考続』一九八四年)このように、八十年代に至り「金瓶梅」に使用されている方言に関して様々な意見が提出されるに至った。この中であって、次の言語学者による研究が注目される。その一は、やや古いが藤堂明保の「明代言語の一側面―言語からみた小説の成立時代」(一九六四年、日本中国学会報十六集所収)で、「万曆本」に見える詩の押韻に言及の混用が見られることから、「金瓶梅」の作者を、嘉靖年間に活躍した山東南部の人ではないかとする。その二は、張惠英の「『金瓶梅』用的是什么山東話嗎」(一九八五年)である。それに依れば、「金瓶梅」には、確かに北方方言が多く用いられている。しかしそのうちのどれが、山東方言であるかを特定することは困難である。更に作中呉方言も見られる。従って、「金瓶梅」に用いられている言語は、北方語を基礎として、その外に他の方言、特に呉方言、をまじえた、いわば南北混用の言語であるとする。その三は、朱德熙の「漢語方言里的兩種反復問句」(一九八五年)で、語法の観点から「万曆本」の文章を見たものである。それに依れば、まず中国語の疑問句法に、凡そ(一)北方方言で用いられる「VP不VP」型と、(二)江淮方言で用いられる「可VP」型の兩種があるが、同一方言中にこの二つの型が併用されることはないとし、この観点から「金瓶梅」を見てみると、全篇の大部分が「VP不VP」型の句型が用いられているが、五十三回から五十六回までの四回のみ、「可VP」型の句型が集中的に用いられている。このことから、この四回だけは、南方の人が補筆したのではないかとする。

(4) 梅節氏が「全校本『金瓶梅詞話』」(一九八七年、香港星海文化出版公司刊)の前言で、十卷本(即ち「万曆本」)は、二十卷本(即ち「崇禎本」)のあとに出版された可能性があることとされる。これに対し、黄霖氏は反論し、「崇禎本」の卷六や卷九のタイトルには、「新刻繡像批点金瓶梅詞話卷之……」と「万曆本」の要素が残存していること、また、「万曆本」で誤刻した字を「崇禎本」でも踏襲している

ことなどから、「崇禎本」は、「万暦本」に基づいて改作されたものに相違ないとされる。(黄霖「関于『金瓶梅』崇禎本的若干問題」(『金瓶梅研究』第一輯所収、一九九〇年江蘇古籍出版社刊)

(5) 「万暦本」九十七回の冒頭詩も、若干の違いがあるが、ほぼ同じ詩である。参考までに書くと、次の通りである。

在世為人保七旬 何勞日夜弄精神
世事到頭終有尽 浮華過眼恐非真
貧窮富貴天之命 得失榮枯隙裡塵
不如且放開懷樂 莫待無常鬼使侵

(6) 平凡社版中国古典文学大系「金瓶梅」の小野忍・千田九一訳による。以下「万暦本」の詩詞の訳文は、すべて同書訳による。

(7) 孟昭連「金瓶梅詩詞解析」(吉林文史出版社、一九九一)

(8) 翁少隴刊本「草堂詩余」二快二十冊(東京大学東洋文化研究所蔵)によった。同書は、正集六卷七冊、続集二卷二冊、別集四卷六冊、新集五卷五冊よりなる。新集には専ら明人の作を収めている。以下すべて「草堂詩余」は、この本によった。

(9) 譚正璧「中国文学大辞典」による。

(10) 譚氏前掲書による。

(11) 秦時雍(字復菴)の詞が若干、「太霞新奏」や「吳騷合編」に見えるので、この時雍のことかとも思われるが、明確なる証拠に欠く。尚秦時雍は、譚氏前掲書によれば約一五七三年前後在世と見える。

(12) 謝肇淛の「金瓶梅跋文」(『小草齋文集』卷二十四)に言う。「金瓶梅の一書は、作者名代を著わさず。中略、書は凡そ数百万言にして二十卷なるも、始末は数年の事にすぎざるのみ。中略、此の書向に鏤版無し云々」つまり、謝肇淛が見た「金瓶梅」は、二十巻とあるから、鈔本段階の「崇禎本」である。「小草齋文集」は、天啓年間に刊行されているので、遅くとも、天啓年間までには、「金瓶梅」の改作が終っていたことが考えられる。

(13) 魏子雲「金瓶梅の幽隱探照」(台湾学生書局、一九八八年) 馮夢龍与《金瓶

梅》の章。また同じく台湾の朱伝馨氏も同様の主張をされている。朱伝馨「明清伝播媒介研究」以「金瓶梅」為例(『金瓶梅研究』第一輯所収、一九九〇年江蘇古籍出版社刊)

(14) 拙稿「短篇白話小説の展開——『三言』に見られる人生観を中心として——」(『集刊東洋学』第三十七号所収、一五七七年)でこの点に論及したことがある。

(15) 同書は、翁少隴本「草堂詩余」(注(8)参照、以下これを翁本と略称する)と比べると、選んである詞の大部分が同じだが、若干相互に出入りがあり、まったく同じではない。まず「草堂詩余」六巻は、翁本の「正集」に相当、「続選草堂詩余」二巻は、翁本の「続集」に相当、「国朝詩余」五巻は、翁本の「新集」にそれぞれ相当する。但し、翁本の「別集」に相当する部分がない。

(附 記)

本稿は、一九九二年度文部省科学研究補助金による研究「時事的素材より見た『金瓶梅詩話』における創作手法と創作意図に関する研究」の研究成果の一部である。

(一九九二年四月八日受理)